

「第二十六回三田文學新人賞 佳作」

綿貫さん

高田朔実

綿貫さんの机はいつも蟬の抜け殻でいっぱいだ。それは、「置いてある」などという通常の言い方では物足りなくて、我々はいつも「溜まってる」とか「載っかってる」と言っている。「溜まってる」はまだいいとしても、「載っかってる」という表現も通常軽いものに対する言い方としてはあまり適切ではないことは知っているながらも、そう言わざるを得ないのだ。ほとんど空気でできているかのようなそれらを、全部大きなボウルに入れて計量してみたい誘惑に駆られたのは、一度や二度ではない。

「一キロくらいじゃないの？」

「四キロくらいあるんじゃないかなあ」

「それはいいよ。せいぜい二・五キロくらいだと思う」

彼女が席を外すと、誰からともなくひそひそ話が始まる。席を外している—この表現もあまり適切ではないのかもしれない。彼女は席を外しているというよりも、席にいないほうが通常なのだ。ここは大学の研究室だからまだいいものの（研究室によってはアウトだろうけど）、高校だったら確実に留年している状況だ。彼女は単に研究生としてここに所属しているだけなので、幸か不幸か学年という概念には縛られていないのだけだ。

そんな綿貫さんも、一応、一日一回は研究室に顔を出す。常にすっぴんでいるのは、肌がきれいだから化粧をする必要がないからなのか、単にする気がないからなのか。肩の下辺りまで真っ直ぐ伸びた髪は、光の加減によって黒にも茶色にも見えて、やたらとつやつやしている。い

つも無造作に黒いゴムで一本にまとめられていて、もったいない気がする。

ややスリムだけれども決して痩せすぎではない、ほどよいスタイルの彼女は、目鼻立ちも整っていて、服装だけでもちゃんとすればそれなりにしゃんとした人に見えそうなものの、着ているものはいつもジャージだ。せめてジーンズとTシャツを着ていればもう少し普通の人に見えるのになあ、とよく思うのだった。

一度、廊下で他の研究室の先生と服装について何か話していたときに、「私もう現役じゃないんで」というような言い訳をしていたのを耳にしたことがある。

「まだまだそんな年じゃないでしょう」

「やだ、現役女子大生じゃないってことですよ」

やけに平和そうな顔をしていて、呑気な人だと思った。大した荷物を持っていなくて、研究室に来ると、愛用しているらしいエコバッグを椅子の上に置き、そそくさとどこかへ行ってしまうのが常だ。二キロの米袋が入っていきそうなユニクロのリュックサックは、出ていくときも背負われたままだ。そしてもちろん、毎日どこへ行っているのかは、誰も知らない。

みんなの言葉の端々から、どうせろくなくところには行っていないだろうと思われることが、ありありと感じられる。芝生の上で体育座りをしているのを見かけた人もいれば、図書館で一心不乱に漫画を読みふけているのを見たという人もいる。彼女がいわゆる「息抜き」以外の行為をしているのを見たという話は、今のところ耳にしない。

「綿貫さんって、どうやって生計立ててるのかな？」

ユミちゃんはデータ解析が一区切りついたようで、誰にもなく話しかける。

「飽きつぽそうだから、コンビニやスーパーでのバイトは難しそうだね」

「夜の仕事でもしてんじゃないの？」

「確かにきれいな顔してるけど、やっぱりやる気なくて無理そう」

彼女はつい最近研究室に来たばかりなので、我々の間では、こうして隙あらば彼女についてどうでもいい推測をするのが流行っている。いわゆるひまつぶしの一つだ。

綿貫さんは、学部生のときと、修士課程のときとで計三年ほどこの研究室に在籍した後、いったん就職してしばらくの間働いて、この秋に突然仕事を辞めたらしい。どういう思惑があるのか知らないけれど、新しい職を探すでもなく、お金さえ払えばとりあえずなれる、研究生という立場でここにいる。研究生になった人の多くは、研究ではなしに、履歴書に空欄を作らないことを求めてここにいるという。彼女の振る舞いは、明らかにその手のものだ。来年博士課程へ進学するだとかしないだとか言っているらしいけど、勉強している素振りはまだでないし、博士号が取れそうな人材にはまるで見えない。博士号を取ったところで、彼女がそれを生かして何かできるようにはとても思えない。

彼女の年齢についても、実のところよくわかっていない。ストレートで知っているなら現在二十六、七くらいなのだろうけど、正確な年齢は、誰も知らない。大学入学時に浪人しているとか、大学在学中に休学したとか、もろもろの理由でもう二十代も終わる頃だという説が有力だ。

何もすることのない彼女とは裏腹に、我々は卒業論文を仕上げているに日々忙しい。とても悠長に人の噂話なんてしているひまはない……はずなのに、どういいうわけか三人集まれば誰からともなく綿貫さんの

話が始まる。

「あれ、抜け殻、拾うのは楽しいかもしれないけど、こっちは見てるだけで気が滅入るんだよね」

「机の上に他の物を置くスペースないじゃん」

「本当、ひまだよね」

「あの人が来てから、そろそろ十日くらい？ 毎日十個ずつ拾ってきてるとすると、今百個ってどこ？」

誰からともなく、数えてみる？ という話が出ては消える。我々もそこまでひまではない。

抜け殻の山は、コピーされた参考論文の山よりも不気味な存在感を放つ。綿貫さんは、たまにそれらを一つ一つつまみ上げながら、うっとりとしている。ここが理系の研究室だからまだいいものの、文系女子の研究室の中にこんなものをぽんと置いたら、たちまち悲鳴が聞こえてくることだろう。

そんなある日、綿貫さんは、誰もが小学生の頃は持っているのに、いつの間にかなくしてしまう虫かごを手を持ってやってきた。二十センチ程度で、透明の容器に緑色のメッシュの蓋が被さり、黄色い取っ手のついた、よくあるあれだ。

数日後、かごの中に葉っぱが出現したのでおやと思っってよく見ると、そこにはアゲハ蝶の幼虫がいた。ぱっちりおめめによく似た模様ががついているこの虫は、可愛いと思う人にとっては、他の虫よりも、よりいっそう可愛く見える。しかし、虫嫌いにとっては、より不気味に見えるのもまた事実。翌日のことだった。突然「ぎゃっ」という叫び声があがった。この研究室は屋外に出て森や林の勉強をするための場所なので、学生の多くは虫に耐性がある。しかし、アミちゃんは例外だったようだ。

「なんだ、虫か。ねずみでもいたのかと思った」

「だって、葉っぱが入ってるから何だろうと思ったら、奴らがいるんだもん。しかも、ただの青虫じゃなくて、なんでこいつらなのよ……！私もう、研究室来れないじゃない！」

「見なければいいよ」

シズルちゃんがやってきて、さっと見えにくい位置に動かした。

「そういう問題じゃないよ」

「でもね、きつとこの部屋、見えないところにゴキブリだっているよ。でも、みんなこうして普通に生活してるじゃない」

いつも以上に長い沈黙が続いた後、ユミちゃんがとりなすように続ける。

「これも、どうせ構内の木からとってきたものでしょう。だったら、研究室どころか、学校の敷地にも入れなくなっちゃうんじゃない？」

アミちゃんは、肯定はしないけど否定もしない。

「あと半年で卒業するんだから、ちよつとの辛抱だよ」

「その前に蝶になるって」

「今九月だから、ラストスパートで蛹になるんじゃないの」

「なんとかなるでしょう、まだ暑いし」

みんなの説得に、アミちゃんは諦めたように席に戻り、
「肝心な本人はいつもいないよね」

とみんなに聞こえるように呟いた。

その後も、綿貫さんは学校に来ているものの、世話はほとんどしなかった。あまりに頻繫に、残された葉が葉脈だけになっているのを見ていられなかったのか、なんとアミちゃんが、サンショウの補充を始めた。よくやるね、との声に、「まあ、触るわけじゃないし」と言い訳しながらも、徐々に愛着がわいてきているようではある。

そうして綿貫さんはいえ、たまに気まぐれに虫を指に載せては、「可愛い」などと都合のいいことを呟くだけだった。

「あんな無責任な人が生き物を飼うなんて、信じられないよ！アオちゃんたち、かわいそうじゃない！」

とうとうアミちゃんが爆発した。

「本人にそう言えば？」

とシズルちゃん。

「だってあの人苦手なんでもん。何考えてるかわからないし、それに、ほら、いろいろあるじゃない……」

とたんに室内が静かになった。みんな思い思いに「いろいろ」について思い浮かべているようだ。

そう、彼女は、年が微妙に上すぎるし、そのうえ立場が中途半端すぎるのだ。社会人入学してきて、きちんと勉強する意思がある人なら問題はない。研究生でも、真面目に就職活動するためにその立場を利用して人ならわかりやすい。

別にあの人が何をしたいかなんでどうでもいいけれど、謎が多すぎるのだ。一応目上だし、来たばかりだし、みんなできる限り気持ちよく過ごしてほしいとは思う。しかし今のままでは、避けるべき話題や触れてはいけない事柄などがまるでわからない。何が地雷になるのか、てんで想像がつかないのだ。

この十日間で彼女が研究室でしたことといえば、せっせと蟬の抜け殻を集めたこと、アゲハの幼虫を連れてきたこと、そして荷物を置きに来るときと取りに来たときに、そばにいる人にあいさつしたことくらいなのだ。自己紹介すらろくにしていないのではないだろうか。どちらかというと、我々が持っている情報は、本人から聞いたことではなく、先生から聞いたことが大半だ。先生も「まあこういうのは個人情

報ですから、本人から聞いてください」とあまり詳しいことは教えてくれない。

机の上には参考書の一冊もなく、「抜け殻を並べるスペースが欲しくて研究生になりました」と言われた方が、まだ我々も納得できるのではないか。そうして早くも、綿貫さんとともに関わろうとする人はいなくなったのだった。

瞬く間に二週間が過ぎ、彼女も少しずつここに慣れてきたのか、たまにお茶部屋で見かけるようになった。この研究室では、月々四百円ずつお茶代を集めて、コーヒード豆やお茶っぱやらを買ってみんなで飲むということをしている。その集まりにも参加することになったらしく、今月は月の途中から来たけれど、日割りではなく一月分の会費をぼんと出してくれたらしい。幹事のユミちゃんは、「意外といい人だね」と言っていた。たかが四百円のこと、これだ。普段変な人だとかいうときは得なのだ。それ以降、ほとんど研究室に顔を出さないはずの綿貫さんと、お茶部屋で鉢合わせする機会が増えてしまった。「角田さん、いつもお茶してるよね」

などと、とんでもない言いがかりをつけられた日には、お湯をぶっかけてやるのかと思った。しかし、この人に何か言っても、少しも響くことはないだろうと思うのもまた事実だ。毒矢を吹いたつもりでも、それがカーンと跳ね返されて、結局毒にやられてしまうのは自分ではないかと、そういう不安を抱かせる人なのだ、彼女は。私も仕方なく、「はあ」とあまいに答えて誤魔化すしかない。

年が離れているせいもあってこっちが遠慮してしまうのか、向こうがなんとなく話を途切れさせないこつを得ているのか、彼女は一人で淀みなくしゃべり続ける。さして親しくもない私にすら、こんなに一

生懸命話しかけるだなんて、そんなに友達がいいるのだろうか。息抜きにお茶部屋へ来ているはずが、全然休まらず、結局お茶部屋へ行った後に外へ出てその辺のベンチでもう一度心を休めないと研究室に戻れない、という事態も度々起きている。

私は今は特にバイトもしていないし、見たいテレビもないから、夕飯も研究室で済ませることが多い。綿貫さんも、バイトが終わるのが五時過ぎらしく、それからぶらぶらして六時くらいにここに来る。不運なことに、ここに来る時間帯が重なってしまうのだ。しかし、この人のために自分の習慣を捻じ曲げるのは嫌なので、こうして綿貫さんとしょっちゅう会ってしまうのだった。

ご飯を食べ終えて食休みをしつつ、誰かが置いていった雑誌をべらべらめくっていると、今日もウスバカゲロウのようにひらひらと、綿貫さんがやってきた。私がちょっと雑誌から目を離して二言三言会話をしてしまつた隙に、どうでもいいテレビの話だとか、秋冬のファッションの話なんかを始める。自分はジャージしか着ていないのに、女子大生のファッションには関心があるらしく、大学構内で見た着こなしや、今年のトレンドなどについて話し続けている。他の人が話しているのならそんなに気にならないのに、それが彼女だというだけで、やけに腹立たしく思われるのはなぜなのか。

「そんな話してるひまあるんですか」

なぜかいつもこの一言が言えなくて困っている。そんなことを言つたが故に、彼女が突然泣き出したり、私にいじめられたというようなことを言いふらされても困る。それになにより、なぜ私が彼女のためにそんなことを指摘してあげて、自分が気まずい思いをしなければいけないのだ。夜だとベンチへ行くわけにもいかず、じりじりとストレスが溜まっていくのだった。

しかし、ある日、院生の人に、

「みんなの話を聞いてると、そこしか受からなかったからって、無理して特にやりたくもない分野に就職してるみたいじゃない。もっとゆっくり自分のしたいこと考えればいいのにね」

と宣ったときには、さすがの私も怒りを無視し切れなくなった。確かに、私たちの学んでいる分野は就職に直結するとはいいいがたく、まるで違う分野に就職する人が大半だ。みんな腑に落ちないものを抱えながらも、それでも働かなければ生きていられないので、多少希望と合わなくとも、受かったところで頑張ろうと努力しているのだ。ちょっと社会人経験があるからといって、偉そうなことを言われる筋合いはない。

他人の話題に入っていくことは普段あまりしない私だったけど、あなた今いくつよ、という言葉は辛うじて飲み込んで、

「働かないで、どうやって食ってけばいいんですか」

と言った。綿貫さんは、「あらいたの」とでも言いたげな面持ちで私を見た。

「畑を耕すとか」

「どこに住めばいいんですか？」

「農家へ行って、働く代わりに、食、住を提供してもらって制度だつてあるし、そういうのを活用してみるのもいいんじゃないの」

「農家で働いてたら、結局したいこと考える時間なんてないじゃないですか」

院生の人は気ままずくなつたのか、私たちをちらっと見ながらそっと席を立つ。

「でも、いつでも辞められるわよ。残業もないだろうし」

「でも、一人部屋があるわけでもないだろうし、周りに気をつかうじゃ

ないですか。それに、お金はもらえるんですか？」

「もらえないんじゃない」

「じゃあ、年金とか健康保険とかどうやって払うんですか」

綿貫さんは口元だけで笑った。

「角田さんはしつかりしてるね。私、就職するまで保険や年金のことなんて考えたことなかったわ」

「じゃあどうしてたんですか？」

「親が払ってくれてたわ。角田さんは、自分で払ってるの？」

「……親に払ってもらってますけど」

いちいち嫌味な人だ。

「綿貫さんこそ、今はどうしてるんですか？」

「もちろん、自分で払ってるわよ」

「お金、あるんですか？」

「この間宝くじが当たったから、それで」

言い返せずにぼかんとしていると、綿貫さんは、

「そんなことでもなければ、会社辞めたりしないわよー」

とおかしそうに言った。

「そんなの信用したの？」

シズルちゃんの言葉に、とっさに「やっぱり？」と思う。

「だって、綿貫さん、風呂、トイレ、台所が共同の下宿に住んでるんだよ。家賃一月一万五千円、多分水洗トイレじゃないところ。どうして宝くじが当たった人がそんなところに住むのよ？」

シズルちゃんは、いつの間にか「知らないの？」とばかりに綿貫さん情報を披露する。

「じゃあ私騙されたの？」

「からかわれたんだね」

「あ、でも百万円当たったことがあるっていう話なら、私も聞いた」

とユミちゃん。どこからか、「百万円当てるためにいくら分買ったんだろう」という声がした。

「まあ、七割程度貯金してたとして、あの下宿でだましまし生活するなら、無収入でも半年はいけるかもね」

みんな明後日のゼミの準備が気になりながら、他人の心配してるひまなどないときほど話が弾む。

「来年の六月になったら、住民税払えるのかな？」

「角田ちゃん、心配しすぎだよ」

「本当にあの人百万当たったから辞めたの？」

「さあね。まあ、言い訳みたいなんなんじゃない？」

「何のための？」

みんな、段々と馬鹿さ加減に気づいてきたのか、誰も答えようとはしない。訊いた本人も、もはやどうでも良さそうだった。

「やっぱり全然わかんない、あの人」

「うん、あんまり関わらない方がいいよ」

誰からともなく会話が途切れ、自然と視線はドアの方へと集中する。

この頃、綿貫さんが以前より頻繁に研究室に来るようになっていたのだ。この間も、話が盛り上がっている最中に突然本人が来てしまい、混乱に陥ったことがあった。何とか誤魔化したので、勘づかれずにすんだとは思えけれど、油断はできない。そんなことがありながらもあの人の話が止まないのは、みんなさらなるスリルを求めてしまうからなのか。

一応バイトの時間は決まっているとはいえ、彼女は時間が有り余っているのか、いつ現れるのかなかなか読めない。徹夜してお茶部屋のソ

ファで仮眠をとっていたら、朝の七時ちょうどに突然現れてコーヒールを淹れ出したとか、夜の十時頃軽やかに登場して、一晩パソコンに向かっていたとか。

そうかと思えば、まともな時間にやってきてゼミに出席したこともあった。先生が何かコメントするよう促すと、「そのグラフ、本当に合ってるの？」などと言いつつ。その理由がまた信じがたいことに、「なんだか見た目があんまりきれいじゃないなって思って」なんて言われた日には……。言われた相手は憤慨しながらも綿密に確認してみたところ、エクセル表に入れる係数を間違えていたことがわかった。綿貫さんの手を取ってお礼を言っていたとのことだった。

そうしてますます、綿貫さんがどういう人なのか読めなくなっていくのだった。

「ねえ、私おかしな噂を聞いたんだけど、綿貫さんのアルバイトのことで。ユミちゃんの一言に、みんな「なにになに？」と耳を傾ける。」

「確か、よその学部でさえないバイトしてるんだっけ」

「そう、まさにそれなの。教育学部に、美術コースってあるじゃない。」

そこでヌードのモデルしてるらしいの」

みんなのキーボードを叩く音が、一瞬止まる。

「この間サークルの後輩とお茶したら綿貫さんが通りかかって、私にあいさつして去っていったのね。そしたら後輩が、『あの知り合いですか？』って訊くの。なんでだろうと思ったら、『うちの学部でヌードのモデルしてる人とよく似てるんですけど』って言われてさ」

みんな、そろって「えーっ」と声をあげる。

「だってあの人三十近いんでしょ？ 信じらんない！」

ユミちゃんが叫んだーしかし、確かに若いことは若いけど、彼女と

比べると三十近い綿貫さんの方がはるかにスタイルもいいし美形なのは誰の目にも明らかだ。みんなは何と云っていいかわからず、本人もしまったと思ったのか、この話題は即座に打ち切られた。

「生活するって大変よね」

誰かがぼつりと呟いた。

しかしまあ、驚きはするものの、違和感はない。みんなも多かれ少なかれそう思っていることだろう。

モデルに一般的に何が求められているのかよく知らないけど、確かにあの人は平均的な女性よりも容姿が優れているといえる。それにより、自己主張がなさそうなのが決め手だ。「こういう人」というのが曖昧なので、描く人にとっては自分に都合のいいように描けて、やりやすいのではないだろうか。まあ、たとえ向いているにせよ、自分を知っている人が周りにわんさかいる環境でそういうバイトができるのは、普通の神経では難しいだろうけど。

「あの人、友達いるのかな」

「知らない男の人と歩いているのをよく見るけど」

「彼氏？」

「相手はいつも違う人みたいだよ」

「さば読んで合コン行ってんじゃないの」

「なんかドクターっぽい人が多いし、昔の同期かも」

「この前学生課の人とタメ口で話しててさ、訊いたら後輩なんだって」

「それも気まずそうだよね。向こうはしっかり働いているのに、こっちは毎日ふらふらしてて」

自分たちはああはなりたくない、とみんなが思っているのがじわじわ伝わってくる。「ねえ、また抜け殻増えてない？」

「そうそう、もう蟬の羽化の時期なんてとっくに終わってるでしょう？」

不思議に思っただけで訊いてみたの」

シズルちゃんは、うれしそうな顔をする。

「構内の目立つところにあつたのは、お掃除のおじさんがあらかた片づけたかったみたいなの。それで今は、家の近所の雑木林や手入れの行き届いていない公園とかから拾ってきてるんだって」

「何をそんなに必死になってるんだろう」

「よく、ため息の数だけ幸せが逃げていくって言うけど、あの人の場合、抜け殻の数だけ幸せが来るとでも思ってるんじゃないの」

「何？ そのおまじない。やばすぎるし」

シズルちゃんの言葉に、次は誰が続くんだろうと思っただけで、三十秒くらい経っても結局誰も何も言わなかった。

「私、そろそろバイト行かなきゃ」

「今日見たいテレビがあるんだよね」

七時になると、チャイムが鳴ったかのように、次々と人が去っていった。

ゼミが終わると、みんな疲れ切って帰ってしまったので、残っていたのは私と綿貫さんだけになった。

私も帰って寝ればよいものの、今回は徹夜しなかったのでさほど疲れていない。帰宅しても寒いだけなので、パソコンで調べ物をする振りをしてネットサーフィンをしていた。綿貫さんは、これまたパソコンでDVDを覗いている。アゲハの幼虫と引き換えに誰かから譲ってもらったらしい、古ぼけたノートパソコン。これをインターネットに繋げたいがために、彼女は以前より頻りに研究室に来ているのだ。抜け殻は、パソコンを置くときには、最低限の面積を確保するために脇に寄せられている。

綿貫さんはしばらくすると、ひとまず観終えたのか、立ち上がってふらふらし始めた。

「角田さんはいつも、遅くまで残って偉いね」

何があったのか、珍しくそんなことを言う。他の人に言われてもさほど気にならないのだろうけど、この人に言われるとそうはいかないのは何故だろう。

「そうか、院に行くんだよね」

「はい」

「なんの研究してるの？」

「まあ、普通のです」

説明するのが面倒なことを察してくれたのか、それ以上は聞かれなかった。私だって、こんなにあからさまな態度はとりたくないのだ。この人と一緒にいると、自分が目に見えて嫌な人間になっていくので、正直なところ辛くなるときだってある。少しかわいそうな気がして、珍しく自分から話を振ってみる。

「綿貫さんこそ、こんなに遅くまで何してるんですか？」

「昔好きだったドラマがDVDになっていたから、全部借りてきちゃったの。パソコンを家に持って帰るのは大変だから、こっそりここで観ているの」

気を使って話しかけてやるんじゃないやなかった。瞬時に後悔する。じゃあじゃあと答えやがって。

「べつにこっそり観なくてもいいんじゃないですか」

「でも、みんな勉強してるから、悪いじゃない」

「あなたが遊んでたって誰も怒らないですよ」と言いたいのをぐっとこらえる。

しかし、なんで私はそういう考えを持つのか、なんで誰も怒らない

と感じるのか。それはつまり、誰も彼女の自分を自分たちと対等だと思っていないと、私がそう考えているということなのだろうか。

綿貫さんを一言で表すと、ぼーっとしている人、という表現しか思い浮かばない。毎日卒論書くのに必死だったり、就職先に免許を取れと言われて時間のない中懸命に教習所に通っていたり、就職先が決まっていなくて大慌てで探し回っていたり。あるいは、大学院の入学資金の足しにするため、勉強の合間を縫ってへろへろになりながらアルバイトしたり、この人は、そういう必死さとは全く縁のないところだだから放っておけばいいだけなのだが、私も私だ。なんで見て見ぬ振りができないのだろう。

綿貫さんのパソコンの画面は、いつの間にかスクリーンセーバーになっている。青虫が葉っぱをむしゃむしゃ食べている、いかにも趣味の悪い待ち受け画面。そうして彼女は、机の上の抜け殻の一つを手にとり、じっと見ている。

「綿貫さん、なんでセミの抜け殻がそんなに好きなんですか？」

「なんでだろうね」

綿貫さんは、媚びているのか、愛想よく微笑む。

「見ると、落ち着くの。透き通ってて、こんなにリアルなのに、もう中身は入ってなくて。私は剥製や骨格標本は、ちょっと死体みたいだなって思っちゃって、あまり飾ったりできないんだけど、抜け殻は昔から好きだったのよね」

それはあなたが抜け殻みたいなものだからですか？ と言ったらなんて答えるだろう。

いっその声に出してみた。でも、それはさすがにやりすぎだろう。それに、私だってそこまでこの人に関わりたくはない。

「こうして私の相手してくれるのも、角田さんくらいよね」

綿貫さんが突然おかしなことを言うので、腰を抜かしそうになる。

「私、年も違うし、立場もあいまいだし、みんなあんまり話しかけてくれないのよ。忙しいから仕方ないと思うんだけど、ちょっと寂しいなって思ってる。」

私が現役でいた頃は、もっとみんなで年齢を超えて仲良くしてたから、あの頃が懐かしいなって思っちゃう」

偉そうに「現役」なんて言葉を使われて、またイライラさせられる。年齢の問題ではなく、あなたの存在をみんな受け入れられないんですよ、と口元まで出かかった言葉をやつのことで飲み込む。それに、私も決して相手をしているのではなく、捕まってるだけなのだ。

綿貫さんは、やがてずっと部屋から出ていった。いつの間にかノートパソコンはしまわれていて、抜け殻が再びそのスペースを埋めていた。

一人になって清々しているはずなのに、彼女が去った後はいつも後味が悪い。見てはいけないものを見せられてしまったような気がするからなのか。

私は来年同じ大学の大学院に進学しようとしているが、勉強が好きなのか、まだ就職したくないだけなのか、自分でもよくわからないでいる。それはつまり、私もふらふらしていると将来あななってしまいう可能性がないとは言えないのだ。

このままパソコンに向かっていても集中できる気がしないので、私も帰ることにした。

それから数日後のことだった。

ユミちゃんがちょっと興奮して話していた。

「あのさ、綿貫さんってけっこういい人みたいなの」

とたんに、室内の空気が妙な緊張感を帯びる。

「昨日の夜、お茶部屋にいたら、浜田君が友達を連れて現れたの。どっかで飲んできた帰りだったみたいで、けっこう酔ってて。それで、サークルの子とバイトの子と二股かけてるって自慢げに話してたのよ。」

そのとき、私とアミちゃんと綿貫さんの三人で、部屋の隅のほうで漫画読んでたんだけど、会話には加わってない状況だったのね。でもそんな話を目の前でされると、なんだか頭にくるじゃない？ だからといって口出ししても気まずくなるから、まあ、何も言わないわよね、普通。でもね、綿貫さんってば、ちゃんと言ったんだよ」

「なんて言ったの？」

「そんなこと自慢するなんて最低って」

高校生の頃、煙草を吸っていた男子たちに向かって「高校生は煙草吸っちゃいけないんだよ」と言っていた学級委員的な同級生のことを思い出す。あまりに正当すぎて、みんな言葉を失ったに違いない。

「で、どうなったの？」

「あいつら、気まずくなつたみたいで、逃げてったよ」

アミちゃんも振り向いた。

「あいつらが消えてから、私たち三人で大笑いしたよね。いい気味だったな」

「『みんなが言うとき気まずくなっちゃうでしょう？ でも私はもともと知り合っても仲良しでもないし、全然問題ないから』って言ってて。けっこういい人じゃないって思っちゃった」

「そうだよ、浜田も、女子が三人もいるのにそんなこと話すなんて、何様のつもりよ」

「今度ゼミのときに、みんなでいじめてやろうぜ」

「そうだそうだ」

綿貫さんに対して肯定的な意見が述べられるのは、けっこう珍しいことだったので驚いた。塗装していない木のテーブルに溢した水が、徐々にしみ込んでわからなくなっていく様子を思い出す。彼女も、じわじわとここに溶け込んできているのだろうか。

「綿貫さんの生き方が素敵とか羨ましいとかは全然思わないんだけど、まあ、いいんじゃない。一応遠慮して、研究室に誰がいるときには堂々と遊ばないようにしてるみたいだし」

「この間レジュメのまとめ方でいいアイデアが浮かばなくて、誰もいなかったから仕方なく綿貫さんに訊いてみたんだ。そしたら、すごくわかりやすく教えてくれたの。『内容はよくわかんないけど、客観的に見るとこういう流れの方がわかりやすいんじゃない?』って。一応社会人やってただけあるよね。ちょっと見直しちゃった」

いつもは否定的な意見の多いシズルちゃんまでがそんなことを言うので、私ですら「そんなもんか」と思いそうになってしまう。

「それと、あのヌードのモデル云々って、やっぱり見間違いだっただけだよ」

「じゃあ、何やってんの?」

「よその学部で、実験補助のバイトしてるんだって。だから昼間はあんまりここに来ないんだってさ」

「最近抜け殻も増えてないし、アゲハの幼虫も消えたし、これ以上研究室が散らかることもないよ」

ついちょっと前まで、綿貫さんと話している回数が多いからという理由で変人扱いされかけていた私は、なんだか面白くない。みんな、どうしたの? と言いたくもなる。抜け殻に洗脳されたのか。そ

れとも、散々忌み嫌っていたのは単なる儀式の一環で、それが過ぎれば普通に仲良くするのが自然の流れなのか。

綿貫さんに対して否定的なことを言うと、今度はかえって私が非難されかねない。

「角田ちゃん、綿貫さんに厳しくない?」

「あの人だって大人なんだから、自分でそれくらい判断するって」

なんて言われてしまう。

「そもそも、綿貫さんはちょっと変わってるから誤解してたけど、そんなに変な人ではないんじゃないの」

「変な人と変わってる人ってどう違うのよ?」

「なんていうか、やってることはちょっと人と違うけど、常識はわきまえてるってこと?」

「あれが常識……?」

私が抜け殻の山を見ているのに気づいたシズルちゃんは、

「ゴキブリの死骸を並べてるより、まだましでしょう」と微笑んだ。

ある日、珍しく綿貫さんとお茶部屋で二人きりになった。最近みんなに以前ほど避けられなくなったせいか、彼女は前より頻繁にこの辺をうろついているのだ。私は相変わらず苦手なままなので、あまりにこやかにしないように、親しげな態度を取らないように、細心の注意を払って接しているけれど。

そんな私の苦勞も知らず、綿貫さんは、一心不乱に夕飯を作る私にふらふらと近寄ってきて、いかにも親しげに、

「角田さんは偉いね」

と言った。私だとげとげしい態度を取っているせいか、他の人はちゃ

んづけで呼んだり、あだ名で呼んだりしているみたいだけど、私だけは未だに「角田さん」と呼ばれている。変なところだけ気を利かしているんじゃないかと思ふ。炒め物の音で聞こえなかったふりをする。

「いつも自炊してて、偉いね」

「綿貫さんに言われても、うれしくありませんから」

いつも通り心の声のはずが、肉声になっている。自分でもびっくりする。綿貫さんは、「ごめん」と言って俯いた。

「自炊しないでやってけるほど裕福じゃないんで」

口から出てしまえば、一つも二つも同じだ。今度はすらすら言うことができた。

綿貫さんは珍しく、明らかに不愉快だとわかる表情を浮かべる。

「私だって」

彼女にとってもまた、「私だって」は心の声のつもりだったのか、言ってしまうからはっとした様子を見せる。

「私だって、何ですか？」

「なんでもない」

「言いかけたんだから、言えばいいじゃないですか」

綿貫さんはちょっとの間考えていた。

「ある日自分が突然違う生き物になってしまったって思ったことはある？」

「はい？」

「朝目が覚めて鏡を見ると、そこに映っているのは、昨日までの自分ではないの」

「はあ」

この人は、どうしちゃったんだろう。真面目な話なのか、思いつきなのか。突然浮かべた微笑から真意を読み取るのは難しそうだ。

「じゃあ誰なんですか？」

「別の生き物になっているの」

「意味がわからないんですけど」

どこから取り出したのか、綿貫さんは抜け殻を手のひらに載せて、じっと見る。何かのメッセージでも受け取ろうとしているかのよう。

「まずね、目が覚めると、そこは昨夜入った布団の中なんだけど、今まで大好きだった掛布団の柄も手触りも全然気に入らなくなってるの。昨夜まで大事にしていた観葉植物が気味悪く見えて、窓から差し込んでくる陽の光が鬱陶しく感じられるの。朝日が好きで、わざわざ斜光じゃないカーテン使ってるっていうのにな。」

そんな調子で、昨日まで何の疑問も持たずに受け入れてきたものが、突然みんな自分と合わないものに思えてくるの」

彼女はまるで見てきたように話すけど、どこまで本当の話なのだろう。

「起き上がって鏡を見ると、顔かたちなんかは、昨日までの自分とほぼ同じだから、どこが違うのかはつきりわからない。でもどことなく、昨日と違うような気がするの。昨日まで何の疑問も持たずに受け入れていた自分の顔なのに、突然、なんで自分はこんな顔だったんだろうと思ってしまうの」

「そんなのよくあることじゃないですか。寝癖がついていたとか、目が腫れぼったいとか」

特に、容姿に自信がある人ほどその傾向は強いでしょうね、と心の中でつけ加える。

「確かに、最初はちょっとむくんでるだけかなって思って、そのまま学校へ行くの。もしそんなに違っているらしたら、誰かが何か言ってくれるだろうし。でもね、そこでも誰からも何も言われない。自分が

変わってしまったと感じるのは自分だけみたいなの。

もしかして、自分は昨日まで全く別の誰かだったのが、何らかの事情で新たに記憶を植えつけられて、今この人物の役をやらされることになったのだろうか……、そういう感じ？」

「じゃあ、あなたは誰なんですか？」

綿貫さんは質問に答えず、にやっと笑って、

「私お腹すいたから、食堂行ってくる」

と言った。他に何か言うだろうと思ったけど、財布を片手に、楽しそうに部屋を出ていった。

今のは何だったのか。格好良く逃げ出すための口実だったのだろうか。一人残された私は、一瞬でもあんな人を相手にしようとした自分の馬鹿さ加減に呆れてしまうのだった。

お茶部屋の曇りガラスの向こうがなんだか眩しい気がして、一瞬ドアの前で立ち止まる。まだ外が明るいのには電気がついていいるからなのか、それとも普段あまり耳にしない、楽しそうで、かつ無邪気な笑い声がドアの隙間からもれてくるせいなのか。いつもより大人数が中にいるのは確かかなようだ。

ドアを開けると、みんなに囲まれてスーツ姿の女の人があった。

「森井さん！」

服装や化粧の濃さが変わっていてすぐにはわからなかったけれど、昨年卒業した先輩だった。

「角田ちゃん！ お久しぶり」

昨年修士二年だった森井さんは、面倒見がよくて、みんなからも慕われていた。ゼミが近いのに、むしろそのせいだからなのか、ほぼ全員がお茶部屋に集合している。私もさっそく片隅に座らせてもらう。

「今日は、どうしたんですか？」

「出張で近くまで来たから、ちょっと寄らせてもらったの」

それからしばらく、よもやま話で盛り上がった。話に夢中になりながら、森井さんが研究室に顔を出すのは卒業式以来初めてだけど、今日はまたどうしてか思っている、と、「綿貫さんに会えなくて残念だったな」と言ったので、驚いてコーヒーを吹き出しそうになった。

「綿貫さんと知り合いなんですか？」

「うん。私が三年生のとき、修士二年だったんだ」

「はあそうですか」

私がいあまり興味がなさそうに言う、森井さんは、

「そんな顔しないで、ね？」

と言った。私と綿貫さんがあまりよい関係でないことを、誰かから聞いたのかもしれない。ひょっこり来た人にこっそり告げ口されるくらい、私の態度は目に余るものになってきているということなのだろうか。

しばらく話した後、森井さんは、せめて差し入れだけでもと言って、帰る前に研究室に寄った。軽やかな足取りだったのが、綿貫さんの机を見た瞬間、足が止まった。これは初めて見た人にとっては衝撃が強いんだなど、改めて思う。

「それ、綿貫さんが自分でやったんですよ」

アミちゃんが横から口を出して、ようやく「……そうよね」と言った。綿貫さんがいじめられていると誤解されていたのかもしれないと気がついた。他人がやったにしろ、自分がやったにしろ、衝撃を受けるのは確かだろうけれど。

森井さんはあたくも抜け殻などないような顔をしながら、椅子の上にとっとお菓子の紙袋を置くと、研究室を後にした。

少し迷ってから、やっぱり森井さんの後を追うことにした。「森井さんっ」と呼び止めると、彼女はほっとした笑顔で振り返った。

自動販売機でジュースを買って、外のベンチに腰かけた。

「綿貫さんって、森井さんがいた頃は、もっと普通の人だったんですか？」

「今はどんな風なのか知らないけど……、少なくとも机はあれほど個人的ではなかったよね」

オブラートに包んだというのがまさにぴったりの言い方に、さすが森井さんと思う。

「森井さんは綿貫さんと仲良かったんですか？」

「綿貫さんと仲が悪い人はいなかったよ。すごくいい人だった」

この場合、どういう意味で「いい人」と言っているのだろう。特に含みはなさそうだし、森井さんは、必要以上に人のいいところだけを見ようとする人ではないことは知っている。以前の綿貫さんは、今はまるで違う印象を与える人だったということなのか。

「ただ、いい人すぎて、たまに大丈夫かなって思ったことはあったかも」

「じゃあ今は、やっぱり大丈夫じゃなくなって、ちょっとおかしくなっちゃったってことですかね」

森井さんは、「角田ちゃん」とたしなめるように言った。

「面倒見はよかったけど、でも、自然にというよりも、自分を犠牲にしていることが多かったのかもしれない。やっぱり、無理してたのかな。私は、綿貫さんが就職してからはあんまり会うことはなかったんだけどね」

やはり、あの机を見た後では、さすがの森井さんも「あまり普通ではない」と感じるものがあるのだろう。

「就職するちょっと前だったかな、綿貫さん、言ってたんだよね。特に興味もないけどどこしか受からなかったから、とりあえず就職しないといけない、アルバイトなら割り切れたけど、これから何十年もやっていけるのか心配だって。何かの飲み会の二次会で、数人でお茶部屋で飲んでたときに、ちらっと言ってただけなんだけど。」

就職が決まったときにはうれしそうにしていたと思うし、綿貫さんが愚痴っぽいことを言うのを初めて聞いたから、ちょっとへえって思ったんだ。夜の一時くらいだったから、半分夢見心地なのかな、なんて思いながら」

森井さんは、道行く学生を眺めながら、遠い目をした。

「でも、あの机、あれが本当の綿貫さんの姿だったのかもね」

「どういうことですか？」

「特に深い意味はないの。ただ、本当は綿貫さんって、ああいうエキセントリックなところもあったんだなって思っただけだから」

私が「エキセントリック」と繰り返すと、森井さんは「今のはオフレコでお願い」と苦笑いした。

「そういえば、綿貫さんって、昔はどんな服装してたんですか？」

「どんなって、普通にジーンズとか、Tシャツとか、冬はフリースとかセーターとか着てたんじゃないの。スカートやワンピースを着てるのはあまり見たことないかも……、今は、違うの？」

「今は、常に上下ジャージです」

森井さんは無言になった。

「やっぱり……、会って見たかったな」

そう呟いた森井さんの横顔は、「会いたかった」というよりも、むしろ「見てみたかった」と言いたげだった。

ゼミが終わってみんなそそくさと帰宅したけれど、思いのほか課題が多いことが判明してしまって、今日も居残りしている始末だ。

昨日までわいわいがやがやがやしていたせいか、今夜はやけに静かだ。誰もいないから、音楽でもかけてしまおうかなと思うくらいだ。

どうも私は要領があまりよくないのか、みんなが集中している間、ついつい気が散ってしまう。効率を求めて濃い時間を過ごしたいのはやまやまだけど、集中すると当然ながら疲れるし、そもそも集中の仕方がよくわからないのだろうか。

最近寒くなってきた。自宅の暖房を入れるのはまだ気がひけるけれども、研究室のそれは気にせず使おうと、ついよからぬことを企んでしまう。それもあって、ゼミ終了後もあえて残っているとも言える。

しかし、本当にそれだけなのか。実は、一人になるのが嫌なのではないか。本当は誰かが近くにいるといいなと思っているのではないか。ここにいれば一人だとしても、誰かしらが突然現れる可能性があるので、全くの一人ではない。一方、自宅にいるのであれば、訪ねてくるのは何かの勧誘の人くらいだ。それでもいいからお話したい、と思うほどにはなっていないけど、こういう日々が続くと、そのうち勧誘の人を家に招き入れてお茶を出すような人の気持ちもわかるようになってくるのだろうか。

こんなことばかり考えているから、勉強が進まないのだ。しかし、やはり気が抜けてしまっているのか、簡単なデータ整理に手をつける気力もない。

早くも行き詰まり、ふと綿貫さんの机に目をやる。綿貫さんには何の興味もないけれど、抜け殻には気を惹かれる。最近はどう増えていないようだ。増えてはいないけど減ってもいないし、捨てられる気配もない。机の上にある抜け殻以外のものといったら、ティッシュケ-

スが一箱置いてあるだけで、それ以外には、見事に何も無い。

なぜに抜け殻などに執着するのかと思ったら、恐ろしいことに気づいた。もはや、抜け殻に執着しているのはあの人ではないのかもしれない。今となっては、空気のように、誰の目にも留まらなくなった抜け殻。それを毎日のように気にしているのは、今では多分もう私だけだ。

仮に、彼女が新しいおもちゃを見つけて、抜け殻を全部捨てると言い出したとしたら。もしそうなったとしたら私は、自ら「引き取ります」と手をあげてしまう可能性もあるのだろうか。

綿貫さんの机は、私の机から少し離れた位置にある。さすがに彼女の椅子に座るのはためらわれて、自分の椅子を机に近づけ、塚のように積み重なった抜け殻を見つめる。そのうちの一つを、指先でつまんで、そっと目線の高さまで持ってきてみる。

かつて目があった部分を覗き込んでみる。不思議なものだ、こんなガラクタミたいな抜け殻でも、やはり一番注意を惹かれる部分は目だ。続いて、精巧な模型のような手足を見る。そこには毛までついている。もともと生き物の体の一部だったのだから不思議なことでもないのだけれども、今にも動き出しそうで、ぞくぞくとする。くつきりした縮模様のついたおしりは、もし虫ではなかったら、噛みごたえのある食材になり得るかもしれない。実際のところ、食材という観点から見たら、エビとどう違うのだろうか。物心ついたときからこいつらを食する文化にいたら、誰もが何のためらいもなく「おいしそう」と思うのではないか。

突然床にばらまいて、パリッと潰してみた衝動に駆られる。小さい頃、よく抜け殻を拾い集めてはそうして踏み潰していたことを思い出す。実際の虫を踏み潰すのは、幼いながらも罪悪感や崇りへの恐怖心があつて躊躇われたけど、対象が抜け殻であればぐしゃぐしゃにな

るまで踏み潰せた。当時、どんなうっ憤が溜まっていたのか覚えていないけど、抜け殻しか知らない私の一面を、こうしてまた抜け殻が思いうさせる。

今度は反対側の目を覗き込むと、ある夏の記憶が頭をよぎった。

今から思うと、当時の私はよほどどうかしていたのだろう。大学の前期が終わり、夏休みに入る直前の時期だったのだけど、このまま大学を辞めてしまおうかと思っていた。大それたことを考えている割には、特に理由はなかった。「一身上の都合で」以外にどうしても何か書かないといけないのであれば、「夏の暑さにやられて」と書いたかもしれない。

毎日、夜が来ると下宿でじっとしている気になれなくて、公園、本屋、海辺、田んぼの畔などを徘徊した。どんなにぐるぐる歩き回っても、ここぞと思える居場所を見つけないに至らず、結局遅くなってから家に帰って寝るだけの日々だった。

ある日、テストが終わった打ち上げと称して、学科の友人たちとパーベキューをして、夜通し飲んだ。一人帰り、二人帰り、気がつくとき、夜が明ける頃には四人になっていた。四人でしばらくさして意味もないことをぼつぼつとしゃべっていたけれど、すっかり朝が来てしまうと、さすがにみんな帰っていった。そうして私一人が残された。

みんなには、帰る場所や、することがあった。私も一応借りている下宿はあるにしても、そこが本当に自分の所属するべき場所であるのかどうか確信が持てないでいた。その日にするべきこともしたいことも何もなかった。

夜通し飲んで帰らなくても、心配する人もいない。単にテストが終わっただけで、こんなに解放感を感じていることが、また虚しい。油を売っているよりも、休学でもして、一度海外にでも出かけてみた方

がいいのだろうか。海の向こうまで行かないまでも、日本のここ以外のどこかで、もっと他にすべきことがあるのではないか、などと思いつつ、具体的な行動を起こすほどの気力もない。

自動販売機でスポーツドリンクを買ってきて、ベンチに座って飲んでみると、小鳥のさえずりが耳につく。場面だけ見れば、さわやかな朝の始まりだ。夏休みに入っているので構内に人影はなかったけど、通行人が私を見たらどう思ったのだろうか。私はここで何をしているのだろうかと思ってみたところで、いくら考えてもわかるはずがないのだ。

ふとそばに生えていた木の根元に、セミの抜け殻がついているのが目に入った。もしかして、今探し回ればまだ羽化したての蟬を見つけれられるだろうか。そう思うと同時に立ち上がった。

子供の頃、田舎にある父の実家で、たびたび蟬が羽化するのを探した。蟬なんて何千匹といそうなものだけど、滞在期間が短いせいもあって、なかなか見つけれなかった。幸運にも見られた年に、大喜びして何枚も写真を撮ったけど、現像してみたら全部の写真が真っ黒だった。悲しく思うよりも、蟬の神様の怒りをもってしまったのだと幼いながらに恐れを抱き、羽化は神聖なものなのだという印象が残っていた。

その朝の私は、羽化の場面に遭遇すれば幸運が訪れるとも思っていたのだろうか。構内をうろろして、羽化する途中の蟬を探し歩いた。生まれたての蟬を見てどうするか特に考えがあるわけではなかった。ただ、その姿を見た自分が何を感じるのか知りたかっただけかもしれない。しかし、朝の七時ともなると羽化したての蟬なんて、もはや見つけようがない。すっかり普通の蟬と見分けがつかなくなっている頃だった。

暑さも増してきたので、あきらめてふらふらしながら自転車を取り

に行き、とりあえず帰って寝ることにした。私があの日探そうとしていたものは、その後見つかったのだろうか。

過去の出来事に浸りながらぼんやりしていると、突然ドアが開いた。「わあ、あったかい」

と言いながら入ってきたのは、予想通りの綿貫さんだった。いるのが私だけだとわかると、少し気まずそうな様子を見せる。ふと、森井さんが「いい人だった」と言っていたのが思い出された。

ぱっと飛び退くのも大げさだし、疲れていたので、抜け殻をつまんだまま会釈する。やっぱり、この人はそれほど嫌な人ではないのかもしれないと思う。ただ、自分の中が変わった部分があることを、積極的に隠すのを止めつつあるだけなのかもしれない。

集団に少し変わった人が入ってくると、みんな初めは嫌悪する。しかしそれは、それまで保っていたバランスが崩れてしまうことを恐れると同時に、みんなが叩こうとしているのは、本当は自分の中であって外に出てこないようにしている、自分自身の芽なのかもしれない。「私ももっと自由でいいんだ」と安心してしまうと、今まで引っ込めていたものをどこまで出しているのか加減が利かなくなりそうで怖くなるのかもしれない。そう、今の私みたいに。

「抜け殻見てるの？ けっこう面白いよね」

「そうですね」

「他のみんなも、たまにそうして見てるよ」

それは知らなかったので、少し驚いた。

「何が面白いんでしょうかね」

「本当、何が面白いんだろう」

拾ってきた本人がこれだ。綿貫さんも席につく。机の上には、お茶のカップを置く場所すらないけれど。

「よかったらどうぞ」

と言って、エコバッグからチョコレート菓子を取り出す。彼女からお菓子をもらうのは少々癪だったけど、ここで断るのも大人気ない。手渡されたのは、コンビニで売っているような、キャラメルやナッツがパランスよく入っていてカリカリした歯ごたえの、おいしいお菓子だった。私がよく行くスーパーには置いていないものだった。

お菓子をもらってしまい、このまま黙っているのも悪いし、何か共通の話題はないものか考えてみる。

「前に言ってた、朝起きたら別の生き物になってるって話なんですけど……」

ようやく思いついたのが、これだった。

「あ、ごめん、あれって私の話じゃなくて、他の人が言ってたことなの。私も意味がよくわからなくて、思わず角田さんに訊いてしまったの」

「私、そんなに変な人に見えますか？」

「変だとか、そういうのではなくて、抜け殻をじっと見てたから、そういうのわかるかなって思っただけ。深い意味はないの。気にしないで」
普段あまり人に気を使わないように見える綿貫さんだけど、ちょっと戸惑っているようだ。私が気分を害したと思って気にしてくれているのだろうか。

「でも、そうですね、なんで抜け殻にこうして惹かれるのか。考えてみれば、まるで理由がないわけではないんです」

綿貫さんは、「どうして？」とでも言いたい気に首を傾げる。

「抜け殻には蟬のそれまでの半生が残されているようで、一つ一つの抜け殻に物語が感じられるというか。そういう妙に神秘的な雰囲気がありますか？」

「うん、ある」

「蟬なんて七年間も土の中にいるのに、地上に出たら一週間で死んじゃうんですよ。長さからいうと、半生っていうよりもほとんど一生なのかもしれない。でも、この間綿貫さんが言ってたように、気がついたらある日突然別の生き物になってしまって、混乱しながらも、新たな生き物として生きなければいけないってことだとしたら、むしろ土の中での生活は半生にも満たないのかもしれない」

私、こんなこと考えてたんだなあと他人事のように思いながら、自然と口が動く。もしかすると、手の上の抜け殻がしゃべっているのかもしれない。

「虫の気持ちはよくわからないし興味もないんですけど、それまで光も差さない場所でひたすら土を掘って暮らしていたのが、突然羽が生えて飛べるようになって、けたたましく泣いて、鳥に食われたり、猫にもてあそばれたり、激変した生活を送らないといけない。相手を見つけたら、迷う間もなく交尾して産卵して死ぬって、よくよく考えると、壮絶ですよ」

「そうね、人間って特に成人しちゃうと、五年くらい経っても見かけが全然変わらなかったり、成長具合がよくわからないもんね。子供の頃は激動の日々なのに。セミとは逆ね」

綿貫さんは大きくうなずいた。

「蟬は、ほんの一晚を越えただけで、今までと全く違う環境で、全く違った体になって生きていかないといけない……」

「何を考えて生きていくんでしょうね。土の中にいたときの記憶を抱えながら生きていくのか、それともそれまでのことは全部忘れて、新しい生き物としてだけの記憶だけが残るのか。まあ、哺乳類と昆虫を比べるのはかなり無理があるんですけど」

私たちは、どちらからともなく黙って、しばらくの間、ただ抜け殻

を見つめていた。

「抜け殻についてこんなに真剣に語る人って、初めて見た」

「私も、抜け殻のことでこんなに話が弾むとは思いませんでした」

私たちは、出会ってから初めて顔を見合わせて笑った。

「じゃあ、私そろそろ帰ります」

そう言って席を立つ。

「遅いから気をつけてね」

「綿貫さんこそ。最近、構内に変質者が出るって噂があるんで……」

「今来たばっかりなのに怖いこと言わないでよ」

再び笑い合うと「それではまた」と言って研究室を後にした。

外に出ると、かなり寒くなっているようだった。帰ったらインスタントラーメンを食べようと思いつきながら、早足で歩いた。

しかし、冷静に考えてみると何かがおかしい。

抜け殻を大量にこの研究室に運び込んで、毎日愛でていたのは綿貫さんのはずなのに、何故私が熱く語り、拳句の果てには綿貫さん本人から「こんなに真剣に語る人」呼ばわりされないといけないのか？ なんだか腑に落ちない思いを抱きながらも、夜も遅いし、まあいいかと思ふことにした。

綿貫さんは、相変わらず何をしたいのかさっぱりわからないけれども、最近彼女を煙たがる人はめっきりいなくなった。もちろん私も含めてだ。

「綿貫さんの淹れたコーヒー飲みたいなー」

「ちょっと待っててね。今日は何人いるの？」

喫茶店でアルバイトをしていたこともある綿貫さんは、やたらと上手にコーヒーを淹れる。ウェイトレスだったから、淹れさせてもらっ

たことはないと言うけれど、門前の小僧効果なのだろうか。おまけに、これもまた作らせてもらったことはないそうだけど、お菓子作りもかなり上手なのだ。みんな「口止めされてるだけで、実際やってたんじゃないの」と噂するのだった。

パソコンもかなりできることが判明して、最近ではみんなから重宝されている。

「綿貫さん、来年はどうするんですか？」

今では、こんなことも気軽に訊けるようになった。

「うーん、結婚でもしようかな」

「相手いるんですか？」

「これから見つけるの」

ほわほわしたことばかり言っているのは相変わらずだけど。相変わらずついでに自分の勉強や研究は全くしていないようだけど、手先が器用だし、その気になれば気も利くので、実験補助のアルバイトには事欠くことがないという。

「それより、寒くなってきたから、今度みんなで鍋しようよ」

「いいですね」

「最近、農場の大根が安く売ってるし」

「うちの近所のスーパーで、今週うどんが安いんですよ」

「たまには女子会もいいよね。私たちだけで楽しくやろう」

そうこうしているうちに、コーヒーのいい香りが漂ってきた。

十二月に入り、年末を前にして疲れが出たのか、風邪をこじらせて、週末寝たきりだったのはもちろんのこと、週明けも何日か休んだ。

木曜日に久々に研究室に顔を出したら、どことなく空気が変わっている気がした。みんないよいよ真剣モードに入ったのかな、と思いが

らふと綿貫さんの机を見ると、抜け殻がなくなっている。見間違いだろうかと思ってもう一度外に出て、中に入って机を見るけれども、やはり机の上にあるのはティッシュの箱だけだ。

「それ、みんな使ってた」

ユミちゃんから声をかけられ、彼女の顔をまじまじと見ると、彼女は「ティッシュ」と言った。

「なんで？」

理由は明らかだけど、義務的に訊いてみる。

「綿貫さん、もう来ないから」

無反応のまま突っ立っていると、彼女は「就職が決まったんだって」と続けた。

「どこに？」

「とりあえず、派遣で働くみたい」

相変わらず、情報通のシズルちゃんが口を挟む。

「抜け殻、欲しかった？」

「いらなけれど。ちょっと驚いちゃって」

今まであったはずのものがなくなったのか、あるいはあるべきではなかったものが本来の姿に戻ったのか。もう、ああいったものを日々目にするのは、今後もう何度もないだろうなと思うと、何と云ってよいのかわからなくなった。

自分の机へ行くと、封筒が置かれていた。控えめな色の、やや小さなものには、やけに丁寧な字で「角田さんへ」と書かれていた。

「角田ちゃん、休んでて会えなかったから、お手紙だった」

ユミちゃんがそっと教えてくれた。

研究室を出て、外を目指す。ベンチに座ると、落葉広葉樹の葉などはもう全く残っていない。いつの間にかこんな寂しい風景になってしまっ

たのだろう。

抜け殻に腹を立てて、ここで気持ち静めていたこともあった。森井さんと綿貫さんについて話したことだって、ついこの間のことなのが、信じられなかった。まあ、よく考えたら昨日のことだって、もはや手は届かないのだから、期間なんて関係ない。過去は過去だ。

自動販売機で買ったホットコーヒーのプルタブを開けて、何口か飲んでから、封筒を開く。のりやシールで封がしてあるわけではなくて、こんなんじゃ誰かに読まれてもわからないじゃん、と心の中で呟く。中には、二つ折りになったクリーム色の薄い便箋が一枚入っていた。

―角田さんへ

短い間だったけど、お世話になりました。

この間お話しした後少し思ったんだけど、蝉が羽化した後に、抜け殻に魂がいくらか残ってしまうようなことがあるんじゃないかって、疑問に思ったことはありませんか？

今度会ったら、また続きをお話しできたらと思います。

綿貫 理子

抜け殻を、一つくらい置いていってなくてもよかったのにも思った。しかしまた、私もいつまでも抜け殻ばかり見ているひまはないのも確かだった。

最後に会えなかったのは、残念なことだったのか、それとも自然な流れだったのか。

多分、続きを話すことはもうないのだろうなと思った。